

三兵答古知幾

十



已五十八

昭和七年八月廿一日
小川次郎氏寄贈



三兵答古知幾卷之十

第四戰鬪法之二

步兵隊攻擊法區別

增

步兵隊攻擊細比支陣圖式

增

同上之解

增

同上陣法回軍法

增

梯陣

洋基陣

前軍退軍法

改

同古法

增

又一法

同新法

又一法

縱橫二隊併合陣

步兵縱隊戰法

同上濫觴

同上戰例

縱隊必用論

大鏈散隊戰法

同上之例

大鏈散隊戰法

同上利益

散隊別種用法

大鏈散戰操法

離合小方陣

圓陣

跪坐法

同上諸例

方圓二陣布列法苦難

遽以別爾多^ル人以步兵防騎兵說

同上

團轉

聯合車

連合車

同上

三兵答古知幾卷之十

第四戰鬪法之二

步兵隊攻撃ノ陣法ハ、唯四種ノ外ニ出テス。曰散隊攻撃、
曰橫隊攻撃、曰縱隊攻撃、曰諸隊併合攻撃、是ナリ。而第
四種ノ者ハ、通常多ク用ル所ニ少、諸戰鬪中、例ノ常ニ
之ヲ見ルナリ。此中ノ一方ヲ擇ミ、事情形勢ニ關係セヌメ、常ニ之ヲ
用ヒントスルハ、甚々尤當セヌ、少シク事理ヲ考ルキ
ハ、直チニ其非ヲ辨スルニ足レヨ、其用法、唯其節度ニ

099
202
6591

步兵隊攻
擊法區別

適スル兵ハ、四法共ニ悉ク良善ニメ、同シク峻功ヲ立ツヘシ、而其中、散隊火戦ヲ賞用スル者ハ、此ハ諸地各所、悉ク之ヲ用ルニ宜ク、又幾多ノ形勢ニモ、能ク相應當シ、而又兵卒銃ヲ使用シ易キヲ以テ、其丸ノ射中スル度モ、亦極メテ切實ニメ、逸失少ク之ニ加ルニ、其間空地廣キヲ以テ、諸兵勇力ヲ顯ハシ、其意ニ隨テ、自在ニ進退スルニ便ナレハナリ、而敵ノ散隊遙望スレハ、其形雲ノ如クニメ、喊聲地ニ震フノ時ハ、諸兵自ラ恐怖ノ情ヲ發スル者ナリ(但シ、此ハ其兵士ニ從テ互ニ強弱アリ、一概ニ之ヲ論シ難シトス)○横縱二隊ノ散

隊ニ逢テ、甚夕困苦スルト多シ、何如トナレハ、横、縱二隊ハ、唯一方ノ戰ヲ要スル者ニ向テ、戰フ所、僅ニ百人ニメ、而空手ノ者其數殆ント百千ナルカ故ナリ、是ヲ以テ散隊ヲ以テ、之ヲ攻擊スルキハ、其形チ蟲蜂ノ象ニテ、圍ミテ、之ヲ刺ミ、竟ニ其毒ヲ以テ、之ヲ衰弱昏倒セシムルカ如シ、縱隊ハ殊ニ此患アリ、平輝著文部是故ニ何等ノ攻擊ヲ論セス、總テ散隊ヲ以テ、之ヲ始ムヘシ、但シ、此時ノ陣法ハ、操練場ニ於テ、既ニ之ヲ布列シ、簡易的當ノ者ヨリ、雜駁無用者ニ至ル迄、悉ク其法ヲ示ス、故ニ略々之ヲ贅セス、而此編ニハ、唯其兵

士ノ準數ヲ論ズルヲ要スルノミ○散隊ノ數ハ初攻
擊ノ時ニハ敵ノ數ニ準シテ之ヲ定ムヘシ、血戰ノ候、
既ニ過ル時ト雖モ其他ノ方法ハ皆其準數ト形勢ニ
從テ之ヲ定ムヘシ、敵兵散戰ノ法ニ熟シ、其術ニ長ミ、
而我兵未タ此ニ熟セサルキハ此ノ如キ、戰法ヲ行フ
ハ殊ニ相應當セストス、若シ又此ニ反メ、敵兵此ニ熟
セスメ、其行フ所、相當セサルキハ常ニ散隊ヲ用ヒ、勉
テ之ヲ以テ全戰鬪ヲナスヘシ、散隊ヲ制スル的當ノ
法ハ工巴倔尼縱隊、又ハ概メ一工巴倔尼全部ナリヲ用ル
ナリ、然ルキハ其隊此ニ由テ堅實ニシテ、且一孤行隊

ノ形ヲナスト、殊ニ多シ、又此ニ由テ、其如比丹、精密ニ
工巴倔尼ヲ知悉シテ、其諸兵卒ヲ用ヒ得ルノ外、又別
ニ此ニ因テ、其兵ノ勇氣ヲ增息シ、而功アルキハ、其工
巴倔尼ノ功ニメ、而又戰法宜シカニス、兵士勇力ヲ出
サス、精カヲ奮起セサルモ、其耻辱ハ、唯工巴倔尼ニ在
テ、他ノ隊ニ波及セストス、而一拔臺龍ヲ以テ、之ヲ制
スルキハ、其功ヲ立テ、又其敗辱ヲ受ル所ハ、共ニ相齊
シタメ、其利害ノ係ル所、全拔臺龍ニ波及シ、按功アリ
スルニ足ラヌメ、敗ルハ時ハ、全兩ナカニト、功ヲ立ル時
拔臺龍ノ耻辱トナルヲ云フ、此ニ由テ、其威カヲ失フモナリ、○諸兵卒散戰

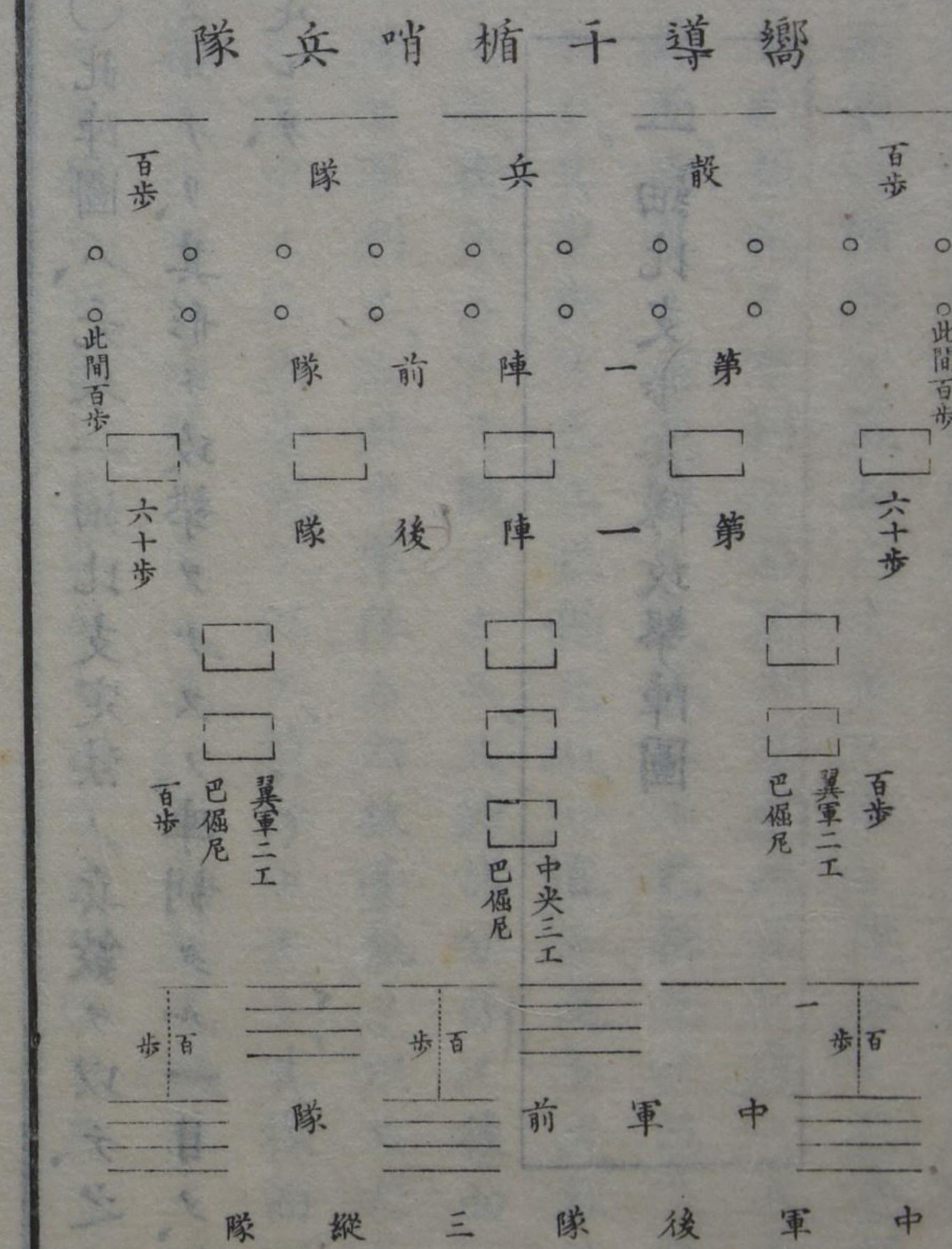
ヲ操熟スルハ、殊ニ肝要ナリト雖モ、各國未タ之ヲ行
ハス、從來ノ散隊ノミヲ專用ス、但シ、從來ノ散隊ハ、其
實ハ、功力ヲ顯ハス所、巨大ナラサルニ非ス。○散隊ノ
火力、猛烈且ツ切實ニメ、其進退敏疾ナルキハ、散戰ヲ
以テ、勝敗ノ期々生スベシ、又散隊ハ、其戰ヲ促カシテ
第一陣、其隊ヲ展開スル迄ニ、至ルヲ期トス、而往々形
勢ニ準シ、更ニ散隊ノ戰闘ヲ持久セシムルコト、多シト
雖モ、單純ノ歩兵戰ニハ、之ヲ用ルヲ少シトス。○敵兵、
古法常用スル所ノ如クニメ、歩兵ヲ以テ、之ヲ進メ、吾
兵モ亦歩兵ヲ以テ、之ヲ迎ケル時ハ、敵全ク吾兵ノ先

頭ヲ失ハサルキハ、其後害トナル故ニ、勉テ先ツ之ヲ
除カントスル者ナリ、但シ、猛烈攻擊有ニ非サレハ、勝
敗ノ期ニハ、至ラサルヲ以テ、別ニ諸兵ノ兵陣隊ヲ制
シ、以テ敵ヌメ、止ムトナク、放銃セシメ、吾兵、此ニ由テ、
更ニ新力ヲ奮起メ、進擊スルニ、便ナラシム、又、假令
ハ、兩軍ノ散隊、既ニ點發法ヲ止メ、兩軍ノ前隊、既ニ其
陣面ヲ發開シ、而其次ノ攻擊ヲ以テ、各其運ヲ試ミン
トスルキハ、左市陣法ハ、蓋シ適用スヘキ法ナリ、
○第一陣ハ、三拔臺龍ヲ以テ、之ヲ制ス、其中ノ五工巴
強尼ハ第一横隊トナシ、而其中ノ二百羅屯ヲ以テ、散

隊トナシ、又其一百羅屯ヲ以テ、嚮導ト楯哨兵隊トナシ、而第一横隊ノ後面六十歩ノ處ニ殘余ヲ拔臺龍ノ諸工巴倔尼ヲ布列シ、而其中左右兩翼ノ處ニテ、各敵ノ外面、兩翼ノ處ヲ點シテ、各二工巴倔尼ヲ設テ、翼軍トナシ、其中央ノ三工巴倔尼八、一直ニ進シテ、敵陣ノ中央ニ、衝入スルヲ職トナス、又此諸分隊ノ後面ニ、中軍隊ヲ布列ス、而此中軍隊ハ六拔臺龍ヲ以テ之ヲ制シ、而其中ノ三拔臺龍ヲ以テ、前隊トナシ、其後面百歩ヲ距テ、中央ト兩翼ノ處ニ、各一拔臺龍ヲ縱隊トナシテ、之ヲ備ヘ、通計三拔臺龍ヲ以テ、中軍ノ後隊トナス、

○此陣圖ハ、元來一細比支定法ノ兵數ヲ以テ、之ヲ制スルナリ、其形ヲ攻擊ヲナスノ、陣制タル一目メ、知ニ足レリ、

一細比支步兵隊攻擊陣圖



同上之解

○此陣法ヲ以テ先ツ衆多ノ散隊ヲ出シテ散蔓セシメ、小隊ヲ進メテ其後援サナシ之ヲ保護セシム、而其後面近距離ノ處ニ幾多ノ大隊ヲ設ケ、此ニ從ハシメ、陸續トメ、兵ヲ進ムル所ハ敵ヲ横隊止ムヲ得ス、直チニ其銃ヲ點發スルナリ、之ニ因テ第一陣ニ屬スル三拔臺龍ノ一分ハ大ニ損失ヲ受クト雖モ、第一陣中、其他ノ隊ハ較著ノ損失ナク又直率ニ敵陣ヲ衝クヲタク近側ニ在ル時ソミ、始テ生スル者ナリ、然凡て中軍隊ヲ進テ此ニ交番メ、戰ハシムヘシ、是ハ其陣制堅實ナ

ル故ヲ以テ敵ノ爲ニ、其陣ヲ破裂分解セラル、ノ患
ナシ、而衆多兵數ノ者、其前面ノ地ニ進出し、尚忍シ
テ其銃ヲ點發セス、其歩勢ヲ壯ニメ、前進スルキハ、是
ニ因テ既ニ其利ヲ得タリトス、而其陣前別ニ妨害ナ
キ、其歩ヲ急ニメ、其進行ヲ促カシ、而又敵軍自若
トメ動セス、吾攻擊ヲ俟チ、其近側ニ迫ルニ至テ、銃火
臺龍ノ横隊トナル者暫時歩ヲ止メテ休立シ、爾後敵ニ後レテ
點發シ、其勢ニ乘ミテ、直チニ其他ノ拔臺龍ト、共ニ相
合メ、一齊ニ峻急歩法ヲ行ヒ、敵陣ニ衝入スヘシ、而敵

軍尚退キ避ケサルキハ、衝陣ノ時ニ終末ノ齊發法ヲ
行ヒ、直チニ其陣ニ闖入スヘシ、而敵敗走スルキハ、中
軍ハ、歩ヲ止メテ靜止シ、急ニ其遊軍ヲ進メテ、之ヲ進
撃セシムヘシ、若シ夫レ、上ニ反メ、敵勝利ヲ得テ、吾軍
敗レ、其形勢、回軍ヲ要スルキハ、遊軍之ニ代テ、其戰ヲ
挑ミ、以テ第一陣ヲメ、再ヒ其陣列ヲ調整スルトス、得
セシムヘシ、

○回軍ノ陣列ヲ調整スルニハ、第一陣ノ三拔臺龍、既
ニ此間ニ、其陣列ヲ整頓シテ、急ニ進向シ、以テ遊軍ヲ
保護スヘシ、但シ、此隊ハ、中軍、再ヒ十分ニ、其軍列ヲ整

ル迄ハ、正戦ヲ行フ勿レ、又此新生ノ三拔臺龍ノ兵ハ、其兵力十分ニ壯ナルヲ以テ、敵五拔臺龍ヲ以テ、攻ルト雖モ、大ニ兵士ヲ損スルニ非サレハ、勝ヲ得ルト能ハサラシメ、能ク之ヲ遮止メ、以テ中軍ヲメ、再ヒ散兵ヲ聚メ、其隊ヲ整頓セシムルニ足レリ。○此ノ如キ時ニハ、危險ノ狀ハ、僅ニ唯一秒時ノ間ノミニメ、敵軍勝利ヲ得ルモ、亦甚タシ久、其兵士ヲ損失シ、其戦法、器械ヲ用ルカ如クニメ、互ニ優劣強弱ノ差ナク、而回軍ノ兵士モ、亦甚タシ久、逃走死亡セサルニ至テハ、三拔臺龍ノ兵ヲ以テ、此ニ當テシメ、其職全ク苦難ナシト。

ス、而又此外、此ノ如クニメ、戦鬪ヲ促スベハ、其狀チ古昔羅瑪時代ノ野戦ノ如シ、何如トナレハ、其近傍ニ逃レンタルノ家ナク、捕ハルヘノ恐ナク、其勇力ヲ發セサラント欲メ、奮發セサルトヲ得ス、衆兵其心ヲ一ニシ、其力ヲ併セテ、之ヲ防戦スルト得ス、衆兵其心ヲ一上示ス所ノ陣法ハ、之ヲ考究スルベハ、或ハ尚穩妥ナラサル者アラシ、然凡此ハ、唯拔臺龍指揮官ノ法則ノミヲ以テ、之ヲ制スルニ非スメ、専ラ今世行フ所ノ方法ニ原ツキテ、之ヲ制スル者ニメ、又之ニ加ルニ、此陣法ハ、衆多ノ兵士、常ニ齊シク、戦鬪ヲ挑ムヘキ利益ア

リ、近屬總兵官、魯國尼亞多人ノ新制陣法ノ如ク、其兵士ノ三分二ハ、戰フト能ハサラシ又而ノ爾後、之ヲ漸次ニ進行フ、戰鬪ニ關セシムル類ノ不便ナル者ハ、一切之ヲ用ヒサルナリ。○總テ今世ノ戰鬪ハ、其決斷スル所、神速猛烈ニメ、其戰ハ火戰猛鬪ヲ主トス、是故ニ今既ニ、其戰法ノ大體ヲ示シ、悉ク其準備ノ法ヲ擧ヘ、而此ヲ進送スルニ、慎謹メ意ヲ用シムルノ後ハ、別ニ血路ヲ蹈ミ、急速ニ勝敗ヲ決スルニ、要スル所ノ者何如ハ、論セスマ、自ラ之ヲ行フコト得テ、遲疑スルヲ、無ルヘミ、故ニ之ヲ略ス。

- 今此書中別ニ攻拒ノ兩用ニ適スル、一二ノ陣法ヲ出ス、此ハ梯狀洋碁ノ二陣ニテ、敵兵ヲ攻擊スル法ナリ、此二陣法ハ、古昔ハ甚々之ヲ尊崇ス、然仄今世ハ、之ヲ稱メ、少シク腐敗シ、惡臭ヲ發スル陣法トナス、按魚肉ノ
腐敗メ、用ニ堪サルニ、渝ル者ニメ、今ハ功用ナキ陣法トスルナリ、○但シ此陣法ハ、小分隊ノ兵ニハ、頗ル的當法トスルハ、世ノ議論ナキ所トス、然ニ大軍ニモ、武學院ノ定法中、尚此二法ヲ設ケ、而操練所ニハ、大教場ヲ制メ、著シク之ヲ操シ、戰鬪ノ時ト雖モ、往ニ尚之ヲ用ルトナリ、
- 梯狀陣ノ主用ハ、諸兵ヲ後面ニ疊列シ、逐次ニ陸續

トメ、之ヲ敵陣ニ進行シ、且ツ其一部ハ常ニ之ヲ留メテ、敵ノ各所ヲ攻襲スル部署ヲ設ク、又攻擊ノ時ニハ、攻兵ヲ助ケテ、之ヲ保護シ、戰ノ利ナキ代ハ、敗兵ニ代テ、戰ヲ接スルノ備ヲナサシムルナリ。○昔時ハ、其用斜行戰闘陣法ト相齊シトス、但シ、昔時メ如キ、火兵的當ノ制ヲ得ズ、猛烈ノ功力ヲ發セサルキハ、此法尚較著ノ害ナシト雖モ、然庄今世ニ至テハ、然ラス、先ツ梯狀陣ハ、其隊間ノ空地、甚タ狹窄ニメ、且ツ容易ニ之ヲ定メ難ク、而又其陣甚タ密ニ疊列スルキハ、

原註ニ曰、拂朗察國ノ定法ハ、百歩トス、又曰、隊間

尋常ノ距度ハ、百歩トス、然凡其指揮使、及ヒ隊中總督ノ要スル所ニ従テ、多少ノ増減アリトス、充實ノ横隊ヲ、攻擊スルニハ、唯僅ノ方法ヲ以テ、攻ルニ便ナリト雖モ、其一部ハ、銃火ヲ發シ難キ害アリ、而又其隊間ノ距度甚遠メ、大約三百步多少ニ至ルキハ、敵軍勁勇ニメ、且ツ慎謹シ、其左右翼軍、衆多ナルニ當レハ、每層ノ梯陣、其始ヨリ直チニ、其前面及ヒ側面ニ、射擊ヲ受ケ、又敵ノ集合發法四方ヨリ、一處ニ向テ、射擊スルヲ云ス、ヲ受ル患アリテ、而之ニ加ルニ、第三ノ梯陣ハ、容易ニ縗亂スルヲ以テ、其銃火ヲ發シテ、之ヲ保護シ、其隊ヲ安保

スルヲ難シ、故ニ各種ノ歩兵戰ニハ、梯陣ヲ以テ、敵ヲ
攻擊スルハ、唯其一定ノ時期ニ限ルノミ。○總兵、撒爾
塹命人モ、亦之ヲ論メ曰、此攻擊法ハ、急進ノ時ニ、諸隊
毫モ其一定ノ地所ヲ、違ハレムルキハ、少シニテモ、其
ルヲ云利ヲ得ルト、少ナシト云フ。按是レ必ス行フ、
云云、但シ、此攻擊法ハ、敵ノ銃丸ヲ受ルト、殆ント連發ノ
ハ、大霰丸ニ觸ル、カ如クナル理ハ、觀者自テ察スルニ
足レリ、亦何ソ吾カ論辨ヲ俟シ。

○今世ノ稱スル所ノ梯狀陣ノ名、甚タ廣クメ定限ヲ
立テス、諸隊一行ニ雙列スル時ニ、之ヲ梯陣トシ、前後

疊列スル庚毛、亦此名ヲ命シ、其甚タシキニ至テハ、或
ハ前行ノ兵ニ、附屬スルニ、他ノ後援ヲ以テスル時ナ
雖モ、此名ヲ稱スル者アリ。○
○其制梯陣ヨリ、古クシテ、而其名毛亦此毛從天禹キ
者ハ、所謂洋基進退陣法是ナリ、此法ハ、伊斯巴泥亞國
悉泄失軍未タ詳ニ起リ、爾後、各國遵用メ、諸兵書陳能
之ヲ示シ、殊ニ之ヲ西軍ニ用バメ法トス、今世迄至テ
ハ、瑪爾斯加爾古官、莫爾知爾滿蒙多、名及北魯西亞國
大加布旋微都、名此ヲ曹煙未タ詳、撒印的、上格漏幾斯、
同及北越多傑斯同、時ニ用シ外ス、但兵、其中ニ就テ、

加布旋微都人ノ法ハ甚タシ久操練ノ定法ニ拘泥シ、是ニ因元良功ヲ得ルナシト云ヘシ。
○洋碁陣ノ名ハ其進退遷動スル状ヨリ起リ、而其状ハ援臺龍又ハ其諸分隊此陣法ニテハ洋碁ノ馮子ノ如玄三布列シテ進退スルニ取ハ其尋常ノ法ハ預メ幾多ハ隊ヲ設ケ此變化陣ニ定ル所ノ形勢事情ヲ便ニ從テ先ツ其一隊ヲ動カシテ進出シ、其隊大礮又ハ歩銃ノ達スヘキ距離ニ至レハ之ヲ後面ニ退歩セシ人、而其距度ヲ離ル、片ハ再ヒ其前面ニ向テ整列シ、唯殊ニ注意スル所ハ精密ニ其以前ノ隊制ニ復スル

トヲ要スルノミ、而此進退ノ法既ニ止ム時ハ更ニ其前面ニ備ル一隊既ニ準備ヲナス者上ノ隊ノ保護ヲ受テ、回軍法ヲ行フナリ、此時ニハ兩翼ノ分隊ハ、形勢ニ準メ各面側ニ備フヘシ、但シ地形ノ障碍ナキ間ハ、定法ノ如ク之ヲ行フヘシト雖モ、徃々此障碍ニ逢フ事多シ、故ニ洋碁陣ヲ以テ、回軍スル者ハ其後隊ヲ以テ、直チニ敵ニ當ラシ又此保護ヲ以テ、其間ニ妨ケナム、兵所道路等ノ危地ヲ、經過セントスルニ、其始メアル所ノ地位ヲ離ル、不能ハスメ、其保護ノ援隊錯亂ハ、或ハ其後面又ハ側面ニ備ルト多久而梯陣、洋碁陣、

前陣
退軍

兩様ノ進退法、混同メ差異ナ久而其差別ハ、今世唯學
斜ニ於テ獨リ之ヲ見ルニ至ル、而又佯暴陣ヲ以テ、曲
軍スルニハ、一定ノ路程ヲ經過スルニ、常ニ一倍ノ時
刻ヲ費耗シ、而一刻ノ時刻ハ、常ニ千萬人力ノ保護神
ニ當ル、是古今ノ通論ナリ、故ニ今世ハ全ク此圓軍法
ヲ用ヒス、而歩兵戰ニモ、全ク之ヲ廢棄シ、或ハ之ヲ用
ユルキハ、唯進退遲緩ニメ、勁勇ナラサル敵ヲ受ルキ
ノミナリ、去、
○諸隊苦戰ヲ受テ甚夕因難スルキハ、他兵ヲ以テ交
番セシメ以テ之ヲ退ケ之ヲ救ハシトスルハ、軍中ノ

人情ニメ、之ヲ指揮スル者ニハ、豈其救法ナキヲ得
シヤ、故ニ大古ヨリ既ニ、此方法ヲ立テ、以テ一陣法ヲ
制ス、羅瑪國ノ兵制ニハ、瑪尼夫連國人及ヒ格忽爾甸
同上ノ陣法中、其完備ノ法ヲ見ル、此外自然止ムトナキ、
運動法ニメ、中世ニ至ルマテ廢棄セス、而今世ニ至テ
モ、其法尚殘留メ、往々新兵法ノ中ニ加入シ、諸家王亦
勉メテ、此法ヲ研究擴充セントス、但シ、其中ノ尤モ惡
法ハ、諸隊各別ニ、他ノ隊中ヲ經過スルヲ許スナリ、然
ルキハ、兵士ハ寃モ、死物ノ器械ノ如クニメ、殆ント戰
鬪ノ本主意ヲ失フニ當ル、

○諸横隊他ヲ經過スルハ、今時操練場定法中ニ示ス
カ如ク、第一陣甚タレク、苦難ヲ受ケ、又ハ其地甚タ険
隘ニメ、長ク敵ニ當リ戰フニ、便ナラサル時ノ法ナリ、
但シ第二陣ニ、幾多ノ空地アリテ、此退軍ニ因テ、繚亂
セス、而其武器銃トノ使用ヲ妨ケサルキハ、則チ始テ
能ウ之ニ應當シ、以テ第一陣ニ自在ノ通行ヲ許スヘ
シ、否ラサレハ之ヲ許サス。○各國往々別種ノ退兵法
ヲ制シ、之ヲ選用スル久シ、是ハ上ノ各儻、脫退ノ法
ニ、比スレハ稍良ナリ、其法第二陣、此時重儻設幾丁ヲ
ナシ、其隊列ヲ變換ス、是ニ於テ、第一陣百羅屯ニ細分

シ諸儻列ヲ正シフメ、其左右ノ一方ヲ繞リ、第二陣ヲ
経過スルナリ、然ニ兩陣相集合スル時ニ、兩ナカラ齊
シク、其戰場ノ定圍外ニ出テ、實ハ定法ニ從テ、此ヲ行
フト雖モ、全ク之ト齟齬シ、之ニ由テ、相交番メ、敵ヲ迎
フルト、能ハサルニ至ル。○拂朗察國ノ戰闘術家、近頃
其法ヲ制ス、但シ此ハ唯之ヲ改正セシム事スル以ミ、故
ニ欠漏多クシテ、又危害多シ、
原註ニ曰、定法ニ記スルカ如クニメ、諸隊退行ス
ルノ法ハ、甚タ危險ナリ、實跡ヲ以テ、之ヲ證トス
ルニ、第一陣敗レテ、實ニ二陣ヲ以テ、其走路外ス

同新法

又キハ、第二陣モ、亦共ニ其情ヲ動カシテ、此力誘導ラナス、而其諸拔臺龍八部ニ區分スルカ為ニ、全其兵力ヲ失ニ至ル、故ニ千八百三十一年保二年拂朗察國操練定法ニハ、此法ヲ廢弃シ之ニ代其新エルニ、李漏生ノ制ニ類スル變化陣法ヲ以テス、○麻爾格以斯官、塹甘貌列以人ノ退兵法ハ、此時第二陣ヲ縱隊トナシ、若シ又第二陣、既ニ横隊トナルキ、其第一、及ヒ第八ノ百羅屯ヘロドント鈎状ニナシ、此ヲ第二、及ヒ第七ノ百羅屯ノ後面ニ布列シ、此ニ因テ、拔臺龍ノ空地ヲ潤大ニセシメ而メ又此ニ因テ、第一陣左右ノ

又一法

一方ニ轉身シ、百羅屯行細分シ、一修正シク、雙列シテ之ヲ繞リ、其形勢ニ準メ、左右兩翼ヨウエイノ方ニ到リテ、此ノ處ニテ、拔臺龍縱隊ヲ制スルニ便利ナラシムルナリ、○又獨逸北州ノ法ハ、此時適度ノ法ヲ以テ、頓近縱橫二隊ノ併合陣ヲ制ス、其法、第二陣ノ正ニ、第一陣退ヲキニ、相觸ル、處ハ、即チ拔臺龍兩翼シ如火炎也、急喷縱隊トナリ、而其橫隊トナルノ處ハ、直チニ其猛敵主向テ、強火ヲ射出セシム、敵烈シク追擊スル時、總テ諸隊ヲ區分スルヲ得ハ、實ニ此法ハ尊崇メ、受用スヘキ法

縦横二隊
併合陣

ナリ

○ 縦横二隊、適度ノ併合法ハ、大ニ進退運動ヲ機轉ヲ増息ス、千七百年ノ終末ニ之ヲ用テ、殊ニ其隊堅實ニ其行迅疾ナルヲ證ス、但シ、新近ノ兵家、往々細事拘泥メ、迂闊ノ議論ヲ立て、此時半縦横ノ一隊ヲ用ヒントスルハ、殆ント迷路ニ陥ルカ如シ、後來早遲ノ差アリト雖モ、必ス其本路ニ回ラサルヲ得ス、學科ノ之ヲ論辨メ、考定スル所、及ヒ實跡ヲ茲ニ證トスベキ例、共ニ乏シカラス、故ニ此ニ意ヲ注キテ、之ヲ熟考シ、之ヲ練磨シ、以テ此陣制ノ利アルヲ弃テ、其考ル所ノ

歩兵縦隊
戰法

正理ニ背ク勿レ

○ 縦隊按 縦陣ハ、新兵學ノ興ル初ニハ、唯之軍行陣法トナスノ也、然ニ後來漸ク、其便利ヲ發明シ、之ヲ戰隊ニ用ル、幾多ノ正理ヲ考出シ、而常ニ此陣ヲ以テ、世ノ普知スル所ノ大功ヲ立テ、ヨリ遂ニ擴斥スルヲ能ハサルモノトナレリ、余意諸形勢ニ拘ハラス、

○ 此ハ輓近ノ戰鬪術家ニハ、殆ント内科者流ノ毒藥カ如ク、今世ノ戰鬪術家モ、亦此縦隊ナキ片ハ、戰ヲナス自能ハス、但シ兩ナカラ、毒藥ト縦共ニ一樣ノ慎謹

嚴戒ヲ要ス、故ニ拙夫之ヲ用ユレハ、良功ヲ得ヘキ時
ト雖モ、却テ大害ヲ生ス、
○輓近ノ兵學ニ、縱隊ヲ以テ、戰隊ト定ムル原因、偶
然ニ事跡ニ出ツ、實ニ竒トスヘシ、○嘗テ風知奶奶ノ
戰闘中、差錯ヨリ此隊ヲ制シ、而攻擊ヲ受ル所ハ、蓋シ
此法ノ依據スル所ニメ、而此戰場中、英吉利人、諸縱隊
ヲ以テ、戰闘スル状固ヨリ疑惑スル所多ク、必ス考定
決裁メ、行フニハ非ト雖モ、其勢ニ猛烈、其勇氣慄悍ナ
リ、是レ各其一方ヲ主張スル者、往々尚議論ヲ立ル
所ナリ、

○歩兵戰ニ、縱隊ヲ用ヒテ、良功ヲ得ルヤ否ヤノ論ハ、
更ニ尚幾多ノ證例ヲ舉ルト雖モ、之ヲ主張スル者モ、
亦其證例乏シキニ非ス、但シ近属ノ戰闘ヲ以テ、之ヲ
見レハ、此法ニテ敗衄スル者多シ、其中ニ就テ、殊ニ千
八百。六年、我文化瑪以谷^{イタ}名ノ戰闘、及ビ英吉利、拂朗
察ノ二軍、亨列涅^{イレヌ}遠山ノ半島ニ在テ、數次ノ戰闘ハ、縱
隊ヲ以テ、攻擊スルノ利害ヲ比較シ、其是非ヲ判スル
未足レリ、○瑪以谷^{イタ}名ノ戰ニハ、拂朗察、總兵工百列^{コベレ}、人
其第一列細綿多ノ輕歩兵隊ヲ督ス、此時工百列^{コベレ}、人亞^アマ
瑪多川ヲ涉リ、其前岸ニ屯ス、英吉利兵ヲ攻ムヘキ命

ラ受ク、而英吉利兵、此汀ニ在テ、專ラ其涉水ヲ俟ク、而
工百列人勇猛ニメ怯レス、直千ニ之ヲ涉ル、但レ未タ
其隊ヲ展開變換セス、實ハ蓋シ此法ヲ行フコト欲セ
サルナリ、此時英吉利兵、横隊ヲ以テ、進ミ来リ、急ニ齊
發法ヲ行セ、此因テ、拂朗西軍、兵卒半列細綿多、指揮
使九十七人ヲ傷失シ、之ヲメ戰フ能ハサランム、此時
英吉利兵、別ニ尚甚タ之ヲ妨害セス、急ニ軍ヲ歛メ、是
ヲ以テ其利トナス、○又貌撒格地及ヒ亞爾蒲刺上同、其
他木布刺那上同ノ戰鬪ニモ、亦上ノ如キ功ヲ得タリ、其
本布刺那上同ノ戰八、千八百十三年、我文化十年第七月廿八

日ナリ、此日拂朗察國ノ瑪爾斯加爾古、官曹爾多名五千
人兵ヲ領シ、本布刺那上同ヲ固守スル、英吉利軍ノ外
端、右翼ヲ擊ツ命ヲ得タリ、此時英吉利軍ハ峙立メ、十
分ニ通行シ難キ高山ニ據リ、其頂キヲ距ルト、大約五十
歩ノ處ニ在テ、其隊ヲ展開シ、橫隊ヲ制ス、但レ其前
面ニ散隊ヲ設タルトナシ、拂朗察兵、頗ル力ヲ費メ、其
山ニ登ルノ後、又散隊ヲ設ケス、唯戰鬪縱隊ヲ制メ兵
々進ム、此時英吉利ノ指揮使、漸次ニ山頂ニ登リ、拂朗
察縱隊ノ方向、及ヒ距離ヲ測ル而其縱隊ノ先頭、漸ク
山上ニ露出シ、漸逼迫メ、小銃ノ良功ヲ得ヘキ度ニ至

ルヲ見テ英吉利軍、直チニ其銃ヲ點發シ、且ツ一齊ニ
銃鎗音子ウトヲ以テ拂朗察軍ヲ衝ク、而拂朗察兵、更ニ之ヲ攻
擊スルヲ、數次ナリト雖モ、唯大ニ其兵士ヲ損失メ、毫
モ功ナシ、故ニ遂ニ此攻法ヲ制止メ、其兵ヲ退ルニ至
ル、而英吉利ノ兵モ、亦此攻擊ヲ拒ミ、之ヲ退ルヲ以テ
意トス、故ニ之ヲ追擊セス、唯之ヲ逐走スル毎ニ、僅ニ
銃ヲ放テ、喊聲ヲ發スルノミナリ、又千八百十一年、我
化文八第五月十六日、亞爾蒲刺アルブカラ地名上出ノイ戰ハ、上比ス
レハ、其利ヲ失スル、更ニ大ナリ、此日諸般ノ拂朗察、列
細綿多ノ兵、細比支縱隊ヲ制シ、以テ英吉利ノ新生歩

兵横隊ヲ擊シトシ、直チニ急進メ、此ニ逼ル、其初起既
ニ英吉利ノ歩兵銃ノ爲ニ、諸總兵、及ヒ竿隊ノ指揮使、
其他馬ニ跨ル者、大略倒落ス、故ニ此ヲ以テ、既ニ縱隊
中、動亂ヲ生シ、良功ナキノ候ヲ見ルニ足レリ、然モ拂
朗察軍、尚其攻擊ヲ促シ、進テ加刺別印銃騎兵ノ達ス
ヘキ處ニ到リ、一齊ニ其縱隊ヲ止歩セシメ、其命令ヲ
俟スル、直チニ其隊ヲ展開シ、且ツ散隊ノ猛火ヲ射出
シ、以テ其戰ヲ促カス、是ニ於テ、英吉利ノ兵、拂朗察軍
ノ兩側ニ進出シ、其照法ヲ正フメ放銃ス、是ヲ以テ、拂
朗察軍、止ムヲ得スル、其兵ヲ斂ム、○此戰鬪ノ間ハ、

大略二十分時ニメ、拂朗察軍、兵士ヲ失フ、列細錦多
隊ハ一千人、指揮使二十一人、小吏五百人トス。○以上
示ス所ノ實跡ニ就キ、此隊ヲ用ユル是非ヲ判スルハ
唯此ヲ觀者ニ託ス、觀者宜ク其當否ヲ裁斷スヘシ。○
總兵刺瑪爾烏名ハ、博々此ノ如キ、戰事ヲ探索シ、其考
究スル所、頗ル敏捷ナリ、其説ニ曰、此ノ如キ證例ハ、唯
其銃ヲ用ル所、一時良功ヲ得ルニ係ル、決シテ此ヲ以
テ、隊制ノ良否等ハ、論シ難シトス。

原註ニ曰、英吉利歩兵ノ銃火強キハ聖多悉百密
亞地名、貌薩格上同及ヒ答刺歇刺中同ノ例ヲ以テ之ヲ

推スニ、唯其兵、此術ニ熟練シ、其理ニ通曉スルニ
係ルト云フ。

○戰鬪縱隊ノ利害ヲ判スルニ、戰鬪ノ勝敗ヲ以テ標
準トスレハ、此法用ニ可カラサルカ如シ、然仄形勢ノ
變化ニ因テ、要スル所ヲ切實ニスルニ至テハ、往々或
ハ其隊ノ必用ヲ定ムヘシ、別シヤ、亦短兵相接スルノ
時ニ至テハ、陣隊務テ稠密ニシテ、以テ一團體トナル
ヲ要ス、是レ縱隊ノ次々可テサル所以ナリ、是ヲ以テ、
此人如キ、戰隊ノ兵數等々、其至意トスル所ニ從テ、每
次ニ之ヲ定ムヘシ、定法ヲ立テ、預メ之ヲ定ムル片ハ、

諸事悉ク齟齬スルヨ多シ、但シ、如此ト雖モ、短兵接戦
ヲ主ト人其法ヲ立レハ、其隊ノ兵數甚タ多カル可カ
ラス、何如トナレハ、進退輕便ナルハ、短兵接戦第ニマ
主要ニム、而兵數衆多、隊制巨大ナレハ、自ラ其運動ヲ
妨害スレハナリ、又、人馬限少、大者莫過百人、此等
○縱隊ヲ以テ急ニ兵ヲ他方ニ遷シ、爾後、其隊ヲ展開
シ、其他ノ戰法ヲ行ハシメントスルキハ、其隊何等ノ
形状ヲナス凡、大率妨害ナシトス、何如トナレハ、此時
ハ唯進行ヲ以テ主用トナシ、他ノ諸妨害ハ、其標準ト
セサレハナリ、但シ、此時ニ其名號ヲ定メ、之ヲ名ケテ

攻擊縱隊トナシ、又ハ防守縱隊トスルハ、全ク無益ト
ナス、輓近ノ戰鬪術ニハ、從來用ユル所ノ軍行縱隊ト
雖モ、其名ヲ取ラス、
○是ヲ以テ、縱隊ハ、今時ノ兵法ニハ、欠ク可ラサル者
トナス、今世ノ戰鬪ヲナストヲ得ルハ、唯此縱隊アル
ニ因ル、故ニ後來別ニ新奇ノ彈丸銃類ヲ發明シ、此隊
アメ、無用ノ者トナスニ至ル迄ハ、暫ク是ヲ以テ、其根
本トナスヘシ、○但シ此ヲ用ユル秘訣ハ、唯的當ノ時
期ヲ擇シテ、之ヲ展開變化スルニ在リ、

原註ニ曰、此語ハ、拂朗察國ノ姪刺^{テラギ}義烏列人ノ記

事ニ出ツ、

○大散隊ハ、拂朗察人之ヲ大鏈隊ト云フ、拂朗察革命人戰闘ニハ、其旺盛ナル極度ニ達スト云フヘレ、但レ諸般人野戰中、此隊ヲ設ケテ、而兵備所ノ城砦等ヲ得、又城堡ニ登ルヲ得ルハ、全ク此隊ノ練磨ヨリ出ル功ニ人、決メ隊制ノ力ニハ非サルナリ、而拂國ノ兵家、獨リ之ヲ賞メ、至重ノ利兵トナスト雖モ、各國往々之ヲ以テ、至害ノ廢兵ナリト云フ、○格魯涅爾官、噶烏涅弗、人近頃固ク其非ヲ辨ス、然庄之ヲ諸家ニ質シ、其説ヲ參考スルニ、未タ全ク允當ノ論ナラスト見エ、

拂朗察人ノ之ヲ賞スル所ノ原註ニ曰、拂朗察ノ兵卒ハ、能ク軍務ヲ會得シ、其性敏捷ニメ、其行謙遜ナリ、而山林丘谷、其他土地切斷スル處ニ在テ、能ク自在ニ進退ス、諸國實ニ其比駢ナシ、吾國ノ諸陸戰ニハ、多クハ吾兵卒ヲ以テ、常ニ散隊トナシ用エト云フ、此語ハ瑪王爾官、百爾聖曾爾里兒人ノ著書ニ出ツ、
又噶格烏涅弗同上ノ散隊ヲ擴斥スル所ノ原註ニ曰、噶格烏涅弗人ノ散隊ヲ擴斥スル所ノ原註ニテスメ利益ナシ、故ニ之ヲ廢スヘシト云フ、

○拂朗察軍ノ大散隊戰ヲ行フハ、伊期巴尼亞ト戰ノ時ヲ以テ、第一トナス、今其戰例ヲ舉ルニ、千七百九十四年六年我寛政第十一月十七日、伊斯巴泥亞ノ軍、列獨烏多營内、礮ヲ設ル、七千六座ニメ、全兵ヲ二横陣ニ布列シテ以テ越爾巴爾地ヨリ聖多魯連丙經刺密喀名ノ平野ニ至ルマテ、陸續トメ諸兵ヲ設クル時、拂朗察軍、之ヲ攻ムルニ、唯散隊ヲ以テシ、其後面各處ニ、唯孤行ノ縱隊ヲ設ケテ、其保護兵トナスノミ、此ニ因テ利ヲ得ル、甚タ大ナリ、何如トナレハ、此戰聞ニ因テ、其兵備所ヲ得ルノ外、總指揮使、侯爵、塙刺ラウニア翁人第五名

營塙デロウ魯烏爾ウル官オルニ到ル、其地ヲ防禦スル方法ヲ定ムル時、二箇ノ銳丸ニ中リテ、殪ル、カ故ナリ、但ミ、指揮使、此大戰ヲ示ス、夕漏多クメ、分明ナラス、故ニ精密ニ其事ヲ記載セス。○又一千七百九十四年上ニ瑪徧達列那地ノ傍ノ戰鬪モ亦全々上ト一般ノ功ヲ奏セリ、此時、伊斯巴尼亞ノ兵、大抵三萬人、二十七所ノ列獨烏多營ニ在ル、拂朗察ノ瑪爾斯加爾古、官、亞烏傑列亞烏ヲ防久拂朗察軍、又上ノ法ヲ以テ之ヲ攻擊シ、大利ヲ得タリ。○那剝列翁帝、在世ノ盛時ハ、如此ノ大散戰ヲ用ル、甚夕多シ、而世間道路ノ談ニモ、拂朗察軍中、良指

揮使多キ所以ノ者ハ、此孤行ノ大散戰、頗ル多キニ因
ルト云フ、實ニ其理ナキニ非サルナリ、何如トナレハ、
散戰ニ因テ年少ノ兵卒ハ、自然ト其勇力ヲ養ヒ、自テ
練磨ノ勁兵トナリ、年少ノ指揮使ハ、其行動ヲ健疾ニ
シ、甚夕顧思スルノ時刻少許ナリ、決斷メ事ヲ行フ、
宛モ雷聲ノ電光ニ、從フカ如クナラサルトタ得スメ
自ラ其才能ヲ磨クカ故ナリ、凡ソ年少ノ主將ニ屬シ、
其壯心ニ任セテ、諸方ヲ行フニ逢ス天、兵士一危難ヲ
經テ、更ニ又一危難ニ臨ミ、次第ニ危險ヲ脱スル度ハ
此ニ由ル、遂ニ驍勇ノ一軍トナリ、其行フ所ノ戦力、其

散隊別種
用法

進退スル所ノ神速(余意)大遠隔ノ戰地ト雖モ速ニ到ル、亦加撒爾往古名將ノノ列細烏年隊ニ、比スヘキニ至ル、

輓近ノ戰法中、殊ニ兵士々、農家村里等ニ埋伏セシ人、
一部ノ小隊ヲ、前面ニ進出シ、以テ敵ノ計策ヲ防キ、戰
鬪ヲ保護セシム、而敵兵疲憊スル度ハ、遊軍ニ合メ、直
チニ擊天之ヲ殺盡スル法ヲ、行フヲ常格トス(余意)此時ニハ、
散隊常ニ其重職ヲ務ムルナリ、是各國殊ニ散戰ノ方法ノ練磨矣、
十分ニ完備セシメント要スル所以ナリ、但シ、今此戰
法ヲ獵ニ喻ルノ理、二道アリ、其一ハ、法ニ熟シ、事ニ通
シ、持久シテ、敵ヲ俟ツク要ス、其二ハ、此間ニ常ニ危難

ノ患アリ、是也、然ルニ、唯此ノ如キノ小主意ノミニテ、
此獵戦^{上ノ散}_云ヲ、禁止セシトヲ要ス、何如トナレハ、狡覦
ト戰フニハ、苦難ナシト雖モ、其間ハ往々虎豹歇^{イア}以那
按犀軀ノ如キ猛獸ノ名、其勁敵ニ喻スルナリ、如キ者アリテ、無益ニ其生
命ヲ失フト多ミ、

○散戰ノ法ハ、古ヨリ用ル所ニメ、其法ヲ練磨スルコ、
既ニ數百載トス、然ニ大散戰ノ定法ニ至テハ、今世尚
未久、一法ヲ考出スル者ヲ見ス、蓋シ其然ル所以ノ理
ハ、必竟散隊ハ單行ノ戰ス、故ニ極テ輕便ナリ、然ニ亦
一齊ニ、戰鬪ノ方法ニ、熟達スルノ要スヒハナム、其

尤モ便利ナル所ハ、兩軍ノ兵、互ニ相進ミテ、戰フニ宜
シ、又互ニ歩兵ヲ用ルキハ、退クキト雖モ、別ニ苦難ナ
シ、然ニ騎兵ニ逢フキハ、其進退甚タ苦難ナリ、故ニ深
ク此處ニ注意シ、誤失ナカラシト欲セハ、地形甚タ廣
闊平坦ナラスト雖モ、敵ノ良騎兵隊ノ目前ニテ、散戰
ヲ行ハントスルハ、尤モ難キ所トナス、而歩兵其戰法
ヲ習ハス其事ニ熟セサレハ、行フ所ノ諸法、多ク功ナ
シトス、總テ此ノ如キ時ニ、殊ニ緊要トスル所ハ、散隊
中ニ、在ル所ノ者ハ、各其危難ノ時期^{騎兵闖入ス}ヲ、正
測明視ノ、防法ヲ行フニ在シ、然ニ其事ニ熟セサレハ、

何シソ明視正測メ、防法ヲ行フヲ得ンヤ其状チ猶火浴法受サル者ハ、其火光ヲ見テ、狼狽スルカ如シ、火浴法ハ未タ詳ナラス、唯對譯法ヲ以テ假ニ譯字ヲ填スルノ三、

○是故ニ無時ノ日ニ於テ、此設戰實用ノ操法ヲ行フハ、無量ノ利アリトス、唯此ヲ以テ、良善ノ定法ニ代ユヘシ、總テ一定ノ操練法ハ、其學ノ所、五十法ニノ戰鬪ニ臨ミ、真ニ實用ニ應スヘキ一法ナシトス、故ニ唯操熟ヲ主トメ、空ク兵士ヲ勞セシムルハ、宜シカラス、是ヲ以テ、的ヲ設ケテ、放銃スル法ヲ學ハシメ、又哨兵セ法ヲ教エルノ外、別ニ騎兵百羅屯ヲ設ケ、其目前ニテ、

散戰法ヲ、操熟セシム、一切他ノ定法ニ代ヘテ之ヲ行ハシム、而操練スルヲ、數次ニノ、兵士既ニ其進退法ニ熟スレハ速ニ、其諸戰法ニ通シ、全ク其職務ニ應當シ、一騎一小騎兵隊、一粵斯加獨龍ノ異ナルニ準シ、正ク其距度ヲ測リ、預メ其經過スヘキ時刻ヲ考定スルヲ得テ、軍中徃々騎兵ヲ見テ、直チニ狼狽スルカ如キ、患ヲ免カルヘシ、

○騎兵ハ此ノ如ク、散隊ノ恐ルヘキ大敵ニメ、又僅ニ單列ノ騎兵ヲ以テ、能ク未熟ノ大散隊ヲ破ルノ例、軍記中ニ示ス所、多キヲ以テ、從來此處ニ、潛心注意ヲ要

スル所以ナリ、拂朗察ノ兵家、英吉利ノ此法ニ熟練ス
ルヲ賞ス、英吉利ノ法、十六人又ハ二十人ノ離合方陣
ヲ制シ、勉テ此ヲ散隊ニ附接セシメ、此間ニ於テ操練
シ、而此方陣ヲメ、急ニ其陣列ヲ調整セシメ、又ハ速ニ
之ヲ展開變化セシメ、其四邊ノ近傍ニテ、戰ヲ學ハシ
ムルナリ、總テ何等ノ國ヲ論セス、此ノ如クニ人、其操
法ヲ行フキハ、此ニ因テ、後來必ス良功ヲ期シ、而拂朗
察ノ兵モ亦共ニ此戰法ニ熟メ、良散隊トナルコト得
ヘシ、按離合小方陣ハ騎兵ヲ
防ハ一大妙陣法トス

原註ニ曰、拂朗察ノ兵卒モ亦今世殊ニ散戰ヲ研

寃シ、照的放銃法ヲ操練シ、一步兵毎ニ年々的ヲ
設ケテ、放銃スルノ數六十發トス、總テ拂朗察散
隊中ニテハ、總兵倔倫名、如キヲ要ス、倔倫
埜爾上ハ、固ヨリ精通ノ銃手ニメ、身ヲ跳ラレテ
能ク速ニ惶フ踰ヘ、其走歩ハ、飛ノカ如ク革籠ヲ
負擔シ、武器ヲ裝ヒ、平素慣習メ、少シモ勞ヲ覺ヘ
スト云フ、
○獨逸軍、及ヒ殊ニハ、幸漏生軍モ亦散隊操熟ノ方法
ヲ研究シ、所謂圓陣ヲ制ス、此ハ急回軍ノ時ハ、急ニ進
メテ、騎兵ヲ防ク良法トス、此陣法ハ、常ニ唯拔臺龍ノ

跪坐法

近傍ノミニ制ス、故ニ騎兵此小隊ニ、正攻撃ヲ行フ時
刻ヲ得ス、而唯其騎兵ヲ以テ、各種ノ散隊ヲ動亂シ、又
ハ刺傷スルノミラ十分トスルナリ、然凡此隊ヲ備ル
片八敵其兵ヲ退クルノ、多少損失ナキヲ得ストス、
○近頃各所往々試験スル所ノ跪坐法アリ、按跪坐法
ヘテ、跪坐スルナリ、其姿制ハ、歩兵第一節ノ行フ、其攻
所ノ如ニ、譯字下シ難シ、假ニ此字ヲ填スルノミ、其攻
擊ヲ退ル、能ハサル片八、此ニ圓陣法ヲ副加シ、戦フ
ハ、希望ノ法ナリ、底列毘亞川又ハ近傍ノ野戰ノ時、魯
西亞軍、拂朗察騎兵ノ攻撃ヲ受ル時、全一列細綿多
テ、此法ヲ行ヒ損失ナタ、却テ其騎兵ヲ挫タ、何如トナ

同上諸例

レハ、歩兵再ヒ起身スル者、其背後ヨリ、烈シク此ニ向
テ放銃スル故ナリ、又英吉利ノ歩兵、列細綿多隊ハ、厄
日多國内亞歷山塹里名ニテ、拂朗察ノ銃鎗騎兵隊ニ
逢フ時、此法ヲ行ヒ又思可齊亞國ノ歩兵列細綿多隊
ハ、噶納爾地ノ扁的斯同ニテ、總兵結爾列爾滿名ノ細
北支騎兵隊中ノ越里的工巴堡尼隊ヲ防ケ時、又此法
ヲ行ヒ共ニ良功ヲ得タリ、又波爾杜瓦爾國ノ瑪爾斯
加爾古官泥人ノ歩兵列細綿多隊、稠密行軍縱隊ヲ以
テ、兵ヲ進ル時、莫才斯古名ノ野戰ノ後、直チニ幾多ノ
魯西亞騎兵ノ攻撃ヲ受ク、此時命令ヲ受テ、歩兵跪坐

圓陣方陣
布列法苦
難

ス、魯西亞ノ騎兵、喊聲ヲ發レテ闖入シ、爾後直チニ、拂郎察ノ騎兵、其後援トナリテ、其内ニ衝入ス、然モ其歩兵隊、此ニ因テ較著ノ損害ヲ受ルトナレ。○以上示ス所ノ諸例ヲ以テ、之ヲ見レハ、散隊戰鬪術ノ原則ハ、横隊戰法ニ比スレハ、簡便輕易ニメ、又全ク相異ナル方法ヲ要シ、而尙未タ適度ノ用法ヲ發明セサルナリ、○散隊遠ク相阻隔シテ、各處一齊ニ騎兵ノ攻擊ヲ受ルキ、圓陣及ヒ離合方陣等ヲ布キ、而自己ノ銃火ニ因テ、吾兵ニ害ナキ制ヲ得セシメントスルハ、尤モ難キ所トナス、兩翼兩端又ハ中央ノ方ニ、此陣ヲ制スル片

ハ必々此患ヲ免カレ難シ、又散戰尋常ノ法ニメ別ニ他ノ妨害ナキキハ、之ヲ進ムルニ、多クハ常ニ一樣同線ニ布列ス如此キハ、又上ノ主要ニ應スル陣ヲ制スルト、更ニ甚タ難シ、然モ攻擊ヲ受ルキハ、其銃火ヲ以テ、互ニ相救フニ便ナル圓陣ヲ、制セントスルハ、亦難キニ非サルナリ、按上ノ互ヒニ、放鏡ノ妨害キノキノ制ニ、代ヘルナリ、總テ小散隊ヨリ、散橫隊ニ至ル迄、各其指揮使アリ、而其指揮官此法ニ練熟シ、而此ノ如キ時ニ臨ンテ、意ヲ注キ、其兵士ヲ驚動セシメサルキハ、之ヲ其傍ニ聚合シ、又否ラサレハ、別種ノ兵卒シヤアン子ト名クニ命シテ、之ニ其到ルヘ

越以別爾
多以步兵
防騎兵說

キ地位ヲ示スト、甚^タ易シトス故ニ散隊ヲ用ユルニハ殊ニ良善ノ指揮使ヲ選ムヘシ。

原註ニ曰、越イ以別爾ベル多人ノ書ニ曰、余歩兵ヲメ、常ニ騎兵ヲ防ク法ヲ、操練セシメント欲ス。其法、騎兵ノ近傍ニテ、戰鬪陣法、又ハ縱隊ニテ行ヲ促シ、騎兵將ニ衝入セントスル庄ハ、其歩ヲ止メテ、動カス之ヲ圍擁スレ庄、其勇氣ヲ減殺セス。其橫隊ノ大運動ヲ見、其走法ノ急疾ヲ窺ヒ、其喊聲ヲ聽テ、毫モ恐動セス。唯的當ノ時期ヲ考ヘ、適合ノ距度ヲ測リ、以テ放銃セシムルヲ主トス。然ニ歩兵

三五ノ指揮使、此操法ヲ熟セサル庄ハ、騎兵進行ノ状ヨリ、疾行ノ度分、及ヒ其道路ヲ經過スヘキ時刻ヲ、詳ニスルト能ハス。故ニ其歩ヲ止ムヘキ時刻方法、又ハ更ニ行ヲ促スヘキ時刻、其他騎兵ノ攻撃スヘキ部位ヨリ、之ヲ擊退スヘキ時刻方法、如何ヲ知ルト、能ハサルナリト。

○小數ノ散隊ト雖モ、鎗鎗ヲ以テ、戰フ庄ハ、蓋シ騎兵ノ攻撃ヲ防キ、良功ヲ得ル法トスヘシ。然庄敵大騎兵隊ヲ以テ、之ヲ襲フ庄ハ、上ノ全列細綿多ニテ、良功ヲ得ル法上ノ跪坐云々少シク運用スル庄ハ、利ナキニ非

サルヘシ、

相手の事は、靈の内に生、金匱無能多か、身也夫

人知譽、失計、子興和、難事、云々、大體真

○小姓、難解、子興和、難事、云々、舞大義、卷道龍、

音、詮、難解、子興和、難事、云々、舞大義、卷道龍、

音、詮、難解、子興和、難事、云々、舞大義、卷道龍、

音、詮、難解、子興和、難事、云々、舞大義、卷道龍、

三兵答古知幾卷之十 終

三兵答古知幾卷之十 終

